

第20回学術集会を終えて

聖路加看護大学看護学部 瀬戸屋 希

第20回日本精神保健看護学会総会・学術集会が、2010年6月19日-20日に聖路加看護大学にて開催されました。学会創立20周年を迎える今回のテーマは「精神看護のアウトカム－測れるもの・測れないもの－」。

初日のRichard Yakimo先生の基調講演、萱間真美大会長講演では、国内外における精神看護のアウトカム研究が紹介されました。アウトカムを示すことの重要性を感じると共に、そこには看護職自身がエンパワメントされるという意味もあることを感じました。

1日目には11のワークショップ、2日目には60題の一般演題発表、2つのランチョンセミナーが行われ、多くの皆様の活動成果を積み重ね、ネットワークを広げる機会となりました。2日目には、名誉会員



シンポジウム（6月20日）

の稻岡文昭先生より、学会創立20周年記念講演を頂きました。精神看護と学会に対する先生の深い愛情と歩みを伺い、また10年後を見据える視点の大切さを教えて頂きました。2日目最後のシンポジウムでは、「測れるもの・測れないもの」という視点から、何のためにアウトカムを測定するのか、といった議論がなされました。2日間を通じ、「アウトカム」という言葉を、研究活動だけでなく臨床・教育・社会活動において自分達の行ったことの意味を示すキーワードとして、あらためて考える機会になったように感じております。

雨の予報に心配しながらの2日間でしたが、800名を超える多くの方々をお迎えできましたことに、感謝申し上げます。限られたスペースの中でご不便を感じられた点や、至らない点も多々あったことだと思いますが、ご参加下さった皆様のご協力のもと学術集会を終えることができました。本当にありがとうございました。中でも、学会運営を支えて下さったのは、企画委員、実行委員、ボランティアの皆様のサポートに他なりません。深く感謝申し上げます。

ご参加・ご支援下さった皆様にとって、思い出に残る2日間になっておりましたら幸いです。

稻岡文昭先生 学会創立20周年記念講演

理事長 田 中 美恵子

6月20日、学会創立20周年記念講演が、初代理事長でもあり、本学会名誉理事でもある稻岡文昭先生（日本赤十字広島看護大学大学院特任教授）により行われました。当日会場は、サテライト会場も含め、先生のお話を楽しみに参加された多くの方々で満杯となりました。



Richard Yakimo先生

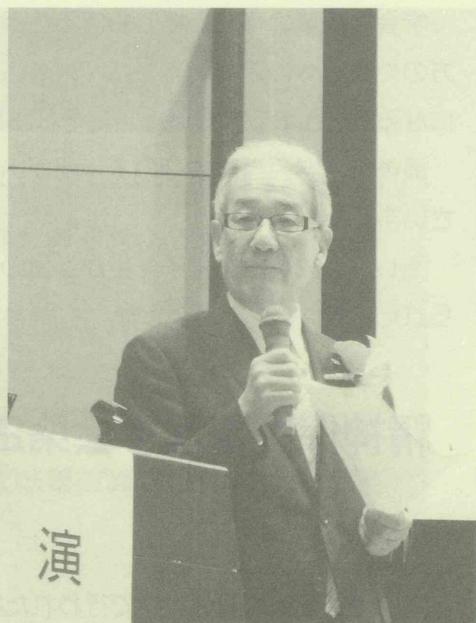
稻岡先生は、本学会発起人代表として、また初代理事長として、1991年から1997年までの6年間にわたり、第1期、第2期の理事長を務められるとともに、第1回から第4回までの学術集会長を務められ、当副理事長であられた池田明子先生とともに、本学会の基盤を作ってください、また本学会の発展のために多大なるご貢献をなされました。

先生はまず冒頭で、本学会の理事として本学会の発展のために多大なる尽力をされ、惜しくも若くして亡くなられた、中川幸子氏、羽山由美子氏、粕田孝行氏に黙祷を捧げることを提案され、参加者全員で3氏に哀悼の意を表し黙祷を捧げました。

先生のご講演は「精神看護学の探求心に火を付けた象徴的な書籍と理論家」と題するスケールの大きなもので、お話を始まると、会場は一気に“稻岡ワールド”に包まれました。先生の若かりし頃の写真を交えた「米国への精神看護学探求の旅」に始まり、フロム・ライヒマンの書籍や『デボラの世界』などの書籍との出会い、マーサ・ロジャーズやペプロウ、ヘンダーソン、ジーン・ワトソン、レイニンガーなど著名な看護理論家との出会いなど、数々の美しい写真とともに先生の壮大な看護学探求の旅を、参加者は満喫することとなりました。

同時に、相も変わらぬ入院中心医療や精神科における患者の殺傷事件、国民の“こころ”的健康問題の危機的状況、精神看護学を抜きにしたカリキュラム改定（1989）などから、学術団体としての精神看護学会設立の必然性を感じて行った経緯など、精神看護の臨床家・教育者としての先生の一貫した問題意識に裏付けられた学会設立の契機を知ることとなりました。

先生は最後に、昨今のうつ病患者や自殺者の急増の問題にも触れられ、本学会が精神障害者はもちろんのこと、地域住民や国民に「顔のみえる」形で活動することを期待として述べられました。また海外の精神看護の関連学会との連携を視野に入れた学術集会の開催も期待されました。本学会設立の真の目的に今一度立ち戻ることの重要性を気づかされたとともに、今後の学会発展のための示唆をいただきました。



第20回学術集会に参加して

国際医療福祉大学大学院 遠藤 加奈子

今回、初めてボランティアとして参加させていただき、多くを学ばせていただきました。

1つめは、暑い中、私たちに労いの言葉をかけながら巡回を続けておられた実行委員の中心スタッフには、却て面倒をみていただいたという感じで、私は言われるままに動くだけだったように思います。聖路加の心配りや雰囲気に感謝します。

2つめに、私は一般演題・ワークショップの担当でいずれも興味あるところでした。質疑応答が活発になされ内容も充実しており、本学会のレベルの高さを改めて感じました。

3つめは、ボランティアとしての学会参加と終了後の懇親会出席を通じ、色々な所属・立場の方々と知り合う機会となり親交を深められたことは、大きな収穫だったと思います。

4つめは、今後の学会へ望むことです。

学会は後輩の育成の場でもあることを私たちは今一度認識していきたいと思います。特に憧れもある諸先輩の方の発表者への質問・アドバイスは、同じ研究をしていくものとして、指導者として、そして人としてもお手本になると思うのです。時としてそれがなされず、今回それが残念でなりませんでした。

最後に、学会当日までの1年間がいかに大変だったかということも、伝わってきました。本当に疲れ様でございました。

そして、故羽山由美子先生が当日の朝、受付フロアーで静かに佇んでおられたように感じました。見守っておられたのではないでしょうか。

精神保健署護学会第20回学術集会に参加して

福岡大学医学部看護学科 黒 髪 恵

今回東京聖路加看護大学で行われた学常集会のテーマは「精神看護のアウトカム—測れるもの・測れないもの」でした。

基調講演で精神看護のアウトカム評価のプロセスを聞き、会長講演では萱間先生が行われてきた調査の内容を整理して講演されました。現在精神看護学領域で行われている研究の積み重ねはアウトカム研究の大変な要素であり、一つ一つの研究を丁寧に行っていくことの大切さを感じました。精神看護学は、対人関係に基づく看護でありアウトカム研究は難しいと感じていましたが可能性があることが分かり希望を持てたことが、私にとっては大きな収穫でした。

また、稻岡先生の講演では、40年も前に精神看護学の発展を見据えて渡米し、強い信念を持って研究されてきた先生の姿勢に感動し、勇気を頂きました。

さらに、「精神障害者の社会復帰のプロセスを促進する要因』について発表の機会を得ました。実際この結果を現場の方はどう考えるだろうか、また現場で起こっていることを反映できているのだろうかと不安でした。自分が研究している内容について会場の方々のご意見はとても有り難く、今後研究をどのように進めていけばよいか整理することができました。

学会では、実行委員の皆さまや座長の先生方の細やかな配慮があり、居心地のいい空間を提供して下さいました。初めての発表でしたが、ほどよい緊張感の中でディスカッションでき充実した時間を過ごすことができました、教育に携わる者として、今日の発表や講演で得た多くの刺激を日々の指導や研究に活かしていきたいと思います。

◆理事会だより－評議員会・総会報告－◆

平成22年6月18日に、第2回評議員会が、東京女子医科大学において開催されました。第7期役員より、平成21年度事業および収支決算報告がなされた後に、平成22年度予算案などの議事を中心に活発な意見交換がなされました。

日本精神保健看護学会第20回総会（平成22年6月19日・聖路加看護大学）においては、以下が承認されました（詳細は、日本精神保健看護学会誌第20巻第1号に掲載予定の議事録をご参照ください）。

1) 平成22年度事業計画について

例年計画されている、学術集会、ニュースレターの発行、ホームページの運営、学術連携に関する活動およびワークショップの企画予定に加えて、新たに下記を予定しています。

学会誌年2号発行、学会誌オンライン投稿・査読システム、学会誌掲載論文の電子化公開、第2回研究助成公募・選考、学術連携に関する活動、20周年記念誌（仮）発行

2) 平成22年度予算について

事業の拡大に伴い、平成22年度より正会員費を11,000円に値上げしており、各種委員会経費等を増額しています。20周年記念誌（仮）については、別途積立金予算より支出いたします。質疑応答の結果、一部修正のうえ、承認されました。

3) 平成22年度日本精神保健看護学会研究助成事業について

平成21年度に研究助成制度が創設され、ニュースレター等で会員からの公募を実施し、審査委員5名により審査した結果、応募2件中以下の2件が採択されました。

1. 研究課題名「看護者のエモーショナル・リテラシー育成のためのTグループの有用性」

研究代表者 鈴木靖子（東京医科歯科大学医学部附属病院）

共同研究者 武井麻子、寶田穂、曾根原純子、赤沢雪路

研究助成額 240,000円

2. 研究課題名「SBS (Social Behaviour Schedule)

日本語版の信頼性・妥当性の検証～長期入院中の統合失調症患者を対象に～」

研究代表者 岡本典子（神奈川県立保健福祉大学）

共同研究者 田中有紀

研究助成額 200,000円

4) その他

平成22年5月31日現在、正会員数が924名となり会員数が増加していることが報告されました。理事会では、学会の発展に向けて事業に取り組むとともに、会員の皆様に事業の内容や成果をニュースレターやホームページを通じてお知らせしていきたいと考えております。学会からの情報にどうぞ目をお配りください。

学術連携委員会の活動

学術連携委員会委員長 野末聖香

学術連携委員会は、諸学会、組織等との連携を図り、保健医療福祉に関する学術的発展を精神保健看護学の立場から推進することを目指し、精神看護における知識や技術の集積や発信、精神看護技術やサービスの診療報酬化に取り組んできている。具体的には、以下のような活動を行っている。

1. 諸学会、組織との連携

日本看護系学会協議会、看護系学会等社会保険連合（看保連）、精神保健従事者団体懇談会に定例で参加し、各学会、組織において求められる役割を担うとともに、本学会からの発信を行っている。また、FMH（World Federation for Mental Health）への参加、関連分野の諸学会等との連携も積み重ねている。

2. “プロトコール・プロジェクト”

昨今集中審議されている高度看護実践家育成に関しては、精神看護分野における高度実践の内容や実践家教育に関する検討を行っている。2009年には“プロトコール・プロジェクト”を立ち上げ、高度実践を行う看護師に必要な技術について日本専門看護師協議会精神看護分野のメンバーとともにプロトコールの作成に取り組んでいる。プロトコールの妥当性、安全性については、専門学会がそれを検討し、オーソライズする必要があり、本プロジェクトは、専門学会として系統的な精神看護高度実践のプロトコール化を推進する活動と位置付けられる。さらに、高度看護実践を通じて患者のQOLに貢献する際、担うことが求められ、かつそれが可能な医行為についても検討を始めたところである。医行為の一部を担うには、その介入技術の安全性の保証が不可欠であり、そのための教育についても同時に検討を進めているところである。

3. 精神看護実践の診療報酬化に向けた活動

看護系学会等社会保険連合（看保連）における活動として、平成24年度診療報酬・介護報酬改定に向け、精神看護実践報酬化のための提案書作成の準備を進めている。どのような実践が診療報酬として評価されるべきかについて、本学会から提案していきたいと考えている。会員各位からのご意見を反映したく、学会HPでご意見の募集をしている。是非ともご意見をお寄せいただきたい。

以上が学術連携委員会の活動の概要である。保健医療福祉情勢は大きな変動期にある。この流れの中で当学術連携委員会の活動は、学会の進むべき方向に沿い、会員各位のご意見を伺いながら進めていきたいと考えている。

＜学術連携委員会メンバー：野末聖香（委員長・副理事長）、野嶋佐由美（副委員長・理事）、永井優子（理事）、佐久間えりか（評議員）、岡田佳詠（評議員）＞

「こころの健康政策構想会議」について

理事 萱間 真美

この会議は発足式が2010年4月3日に行われ、5月28日に岡崎祐士座長（松沢病院長）から長妻昭厚生労働大臣に「精神保健・医療改革に関する提言」を提出した。

会議の構成員は90人（うち起草委員12名）で、このうち当事者・家族委員が全体の30%以上に達することがこの会議の特色の第一である。約2ヶ月弱という短期間で提言書をまとめるために、10のテーマ（=精神保健改革、アウトリーチ精神医療、多職種チーム精神医療、入院医療、専門精神医療、介護者（家族）支援、人材育成・研修・認定、サービス評価、法律に関する整備、自殺対策）ごとにワーキンググループ（以下WG）がつくられ、体力・気力・知力の限界に挑んだ感が今でも強く残っている。今後は「こころの健康の保持および増進のための精神疾患対策基本法案」（仮称）を超党派の議員立法を目指して進む予定であり、署名活動を継続する予定である。英国におけるMental Health Actが、ひとりの当事者とその家族の声から始まって力強い展開を見せたように、日本における当事者・家族と専門家との協働が、しっかりと歩を進めてゆけるよう、学会員の皆様にも是非御協力をお願い申し上げたい。

編集委員会より

厳しい暑さが続いておりますが、皆様、いかがおすごしでしょうか。

今年度、本学会誌は、国際文献社に編集事務を委託しての初めての発刊となりましたが、例年より発刊が遅れ、皆様にはご迷惑とご心配をおかけいたしました。しかし6月30日に第19巻1号を無事発行することができ、投稿者の皆様と査読者の先生方には、多大なご協力を頂き、ありがとうございました。

今年度から随時投稿が可能となり、第19巻2号の発行も12月～来年1月に予定しております。さらに、現在、オンライン投稿の準備を進めておりますが、来年に入りオンラインでの投稿を開始できればと考えております。オンライン投稿の実施にあたっては、投稿規定が変更になりますので、追ってニュースレターや学会ホームページでお知らせしたいと思います。

また今後、日本精神保健看護学会誌に英文での投稿も可能なように、英文で投稿して頂く場合の投稿規定を加筆いたしました。今回のニュースレターにも掲載しております。

めまぐるしく変化する精神医療の現場で、精神科看護師や高度看護実践家の役割や機能が問われるようになってきています。このような中、本学会誌が、精神看護におけるエビデンスを蓄積できればと考えておりますので、多くの皆様からの投稿をお待ちしております。

編集委員長：宇佐美しおり

副委員長：安藤幸子

編集委員：遠藤淑美、鈴木啓子、岡谷恵子、有松操

名古屋セミナーの報告

猛暑の7月23日（金）13時30分から16時まで「研究における倫理的課題の検討」というテーマのもと愛知県産業労働センター（ウインクあいち）15Fの愛知県立大学サテライトキャンパスにて学会員6名の参加者を得て教育セミナーを開催しました。

高知女子大学大学院の岩瀬貴子講師からは「研究における倫理的課題の検討」を主題に研究対象者とその倫理的課題について、人権擁護の視点からは自己決定権、プライバシー権、匿名性及び守秘性の担保について、障害者、子供、学生のケースを素材に情報提供がされました。研究の利益とリスクのバランス、インフォームドコンセント、施設内倫理審査についても事例を交えながら、解説していただき、ディスカッションを行うことができました。少人数のセミナーであったため、お互いの経験と課題をベースに活発な意見交換がされ、研究を行う上での倫理的な配慮について様々な示唆が得られたセミナーでした。

（教育活動委員会委員長 岩瀬 信夫）

10月研修のお知らせ

シンポジウム「セルフケア支援の現状と課題」

セルフケアとは、ストレスによって自らの健康が危機に曝されていることに気づき、それに対処するため、身につけた知識や技術を実行に移すことを意味します。

看護界では、糖尿病や腎不全等の慢性疾患患者の自己管理、そして精神障害者のリハビリテーション等の領域で、セルフケアは重要な位置を占めると考えられてきました。最近では、精神保健、慢性身体疾患の医療・看護、リハビリテーション、伝統医療と民間療法、スポーツのコーチング、ボディワーク、セルフヘルプグループ等、様々な領域でセルフケアの重要性が指摘されています。

いずれの領域においても、適切なセルフケアとその支援に向けて多くの知識や技術が蓄積されつつあります。しかし、領域を越えて互いの知識や技術を比較し、結びつける試みは乏しいように思われます。

本シンポジウムでは、慢性身体疾患患者のセルフケアに関する研究・教育に長年携わって来られた斎藤やよい先生、精神疾患患者の看護におけるセルフケアモデルの実践に専門看護師として関与してこられた岩切真砂子先生からの発題を軸に、広くセルフケア支援の現状、課題、展望について考えてみたいと思います。

シンポジスト

1. セルフケア支援の理論と実践1—慢性身体疾患者の場合—

東京医科歯科大学大学院生体・生活機能看護学分野
教授 斎藤やよい

2. セルフケア支援の理論と実践2—精神疾患患者の場合—

財団法人慈生会慈生病院
専門看護師 岩切真砂子

3. セルフケア支援の包括的な理解に向けて

東京医科歯科大学大学院精神保健看護学分野
教授 宮本真巳

司会：東京医科歯科大学大学院精神保健看護学分野
准教授 美濃由紀子

日時：平成22年10月31日（日）13時～16時

場所：東京医科歯科大学M&Dタワー2階共用講義室
2（定員111名）

JR御茶ノ水駅下車5分、地下鉄丸の内線御茶ノ水駅下車3分

※参加費無料、事前登録不要です

（教育活動委員 宮本 真巳）

H23 研究助成の募集 研究助成について

若手精神看護学研究者の育成のために、研究費用の一部を助成し、その研究成果により精神看護学の発展に寄与することを目的として22年度より研究助成が開始されました。次年度の募集に関しては10月1日より公募を開始します。

詳細は学会HP <http://jamhn.jp/> 「研究助成応募要領」にてご確認ください。

<応募資格>

- 1) 研究代表者：今年度末で42歳以下の会員歴1年以上の方。
- 2) 共同研究者もすべて会員であること。
- 3) 他団体の助成と重複しないこと。

<助成金> 1件につき30万円を上限とする。(予算総額60万円)

<助成機関> H23年4月1日～平成24年3月31日

<応募期間> H22年10月1日～11月15日(消印有効)

<採択通知> H23年1月31日以前

<研究成果> 本学会への報告義務、学会誌への投稿義務があります。

送付先(連絡先)

日本精神保健看護学会 事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19

株式会社国際文献印刷社内

TEL: 03-5389-6254 Fax: 03-3368-2822

(教育活動委員会)

■日本精神保健看護学会20周年記念誌の発刊について

本学会は、1991(平成3)年7月6日に設立され、今年7月に創立20周年を迎えました。本学会のこの20年間発展は目覚しく、精神保健看護学の歴史としても、後世に残す価値があるものと考えます。

第20回総会では、平成22年度事業計画として20周年記念誌の発刊が承認されました。また、制作予算として別途積立金から総額1,361,600円を支出することが承認されました。今後、20周年記念誌刊行委員会を立ち上げ、平成23年6月末の刊行を目指して編集を進める予定です。

ニュースレター第1号をはじめ、設立準備のための資料、創立期(1996年頃まで)の学会および学術集会等の写真などは、現在の事務局に残っていません。これらの貴重な資料や記念誌への掲載の必要があるものが皆様のお手元にございましたら、必ずご返却いたしますので、事務局または20周年記念誌編集委員会までご連絡ください。ホームページ上からもご連絡いただけますので、ご協力をお願い申し上げます。

(20周年記念誌編集委員会委員長 理事 永井優子)

第21回 日本精神保健看護学会総会・学術集会のご案内

以下の要領で、第21回日本精神保健看護学会総会・学術集会を開催致します。企画委員会では現在、多くの皆様に参加して頂けるような企画を検討しております。多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

メインテーマ：精神看護の先進的実践を求めて
大会長：岩瀬 信夫（愛知県立大学看護学部）
開催日：2011年6月18日～6月19日
会 場：愛知県産業労働センター「ウインクあいち」
 (JR名古屋駅桜通口より徒歩2分)

学術集会のお問い合わせ先（事務局）

E-mail japmhn21st@nrs.aichi-pu.ac.jp
 FAX 052-736-1415
 (事務局長：山田浩雅、担当：中戸川早苗 「日本精神保健看護学会学術集会問い合わせ」とお書きください)
 なお、ホームページには12月初旬ごろに掲載予定です。

学術集会ワークショップを募集します!!

第21回大会では、会員の皆様から幅広くワークショップの企画を募集致します。ふるってお申し込みくださいますようお願い致します。

ワークショップの企画に応募される方は、下記の要領でお申し込みください。

● ワークショップ企画応募の要領

記載事項：ワークショップ申込用紙（12月初旬からHPよりダウンロードできます）に、テーマ、内容、

参加予定人数、企画代表者と企画者の氏名・所属・会員番号・連絡先、教室の希望（大きさなど）、使用機材（パソコン、パワーポイント等）を記載してメールまたはFAXにてお送りください。

*ワークショップ代表者は学会員とします。他の企画者も原則として学会員とします。

学会員以外の方は「協力者」として、ワークショップの企画にご参加頂けます。

申込期間：2011年1月28日（金）

申し込み・問い合わせ先：

E-mail japmhn21st@nrs.aichi-pu.ac.jp
 FAX 052-736-1415

(担当：中戸川宛 「日本精神保健看護学会学術集会ワークショップ申し込み」とお書きください)

注) 申し込みが多数の場合には、調整をさせて顶くこともありますので、予めご了承ください。後日、企画採用の結果についてお知らせ致します。

● 演題登録の開始時期

12月中旬を予定しています。HPに詳しいご案内を致します。

ニュースレター原稿募集

学会では、学会員の主催する精神看護関連の活動を支援し、また、より広く交流を図れるよう、ニュースレターに掲載する原稿を広く募集しております。

皆様が主催される様々な精神看護関連の活動について、ニュースレターでの広報をご希望の際には、その活動内容、主催者（お名前とご所属）、開催場所・日時、参加方法、連絡先に関する原稿をお寄せください。

また、現在の精神保健医療や看護に関するご意見や問題提起、あるいは学会員の方々と共有したい情報などもお寄せいただければ幸いです。広報委員会で検討させていただき、ニュースレターに掲載したいと考えています。皆様からのお原稿をお待ちしております。



編集後記

▼記録的な猛暑の夏は、熱中症対策はじめ気候変動への備えの必要性を我々に突きつけました。▼待ち望んだ秋に心身の疲れを癒し、社会情勢の変動を見通してメンタルヘルス支援体制の強化を図りたいものです。▼梅雨時に開催された第20回学術集会は、「精神看護のアウトカム－測れるもの・測れないもの」のテーマのもと、充実したプログラムを通して多面的に学び合う、熱い交流の機会となりました。▼特別講演では、稻岡先生の精神看護学探求の個人史と当学会の設立・発展の歴史の重なりに感銘を覚えました。▼課題山積の「今とこれから」を見据えて、精神保健医療福祉分野における看護職の役割機能をより確かなものにするために、学会活動を通して精神看護の実践・研究・教育の成果を発信することの意義を実感しています。